

日本のモノづくり力を

外交の切り札に

伊藤 澄夫

伊藤製作所社長
中京大学特別栄誉客員教授

覇権国の米国は軍事や経済、技術、金融で自国を脅かそうとする。いかなる国をも常に叩いてきた。

1970年代後半より米国が得意としていた半導体の生産で日本が世界シェアの60%を超えた。米国はこれに危機感を持ち、半導体の生産を韓国へ仕向けたのだ。72年まで多くの韓国兵士がベトナムで米軍と共に戦ってくれた恩義もあったのだらう。

日本はさらに、半導体に報復関税をかけられたことと、プラザ合意で急激な円高に誘導されたことにより、すべての製造業は窮地に陥った。これが失われた20年のスタートだ。

国中が不景気に突入し、日本のハイテクメーカーの技術者や金型技術者が毎年百人以上、サムソンやLGに引き抜かれたのだ。

日本の技術力に再び脚光

以来30年が経過し、幸いなことに近年多くの国々から再び日本のすごさが注目され始めた。それは、時速600km³を超える世界最速のリニアモーターカーであ

評論家の櫻井よしこ氏に原稿を送ったところ、「これは良い本だ。推薦したい」と帯に写真付きでコメントをいただいた。

それは、「世界に誇るモノづくりの力が日本外交最強の切り札になる。現場に徹する伊藤澄夫氏の言葉が、ストンと胸に落ちた」というもの。余談だがこの推薦文に謝礼を申し出たが、受け取っていただけなかった。

日韓の技術力の実態

今年に入って以降、韓国から日本へ理不尽な事例がさらに頻発し、政府以上に多くの日本国民はいつになく反発。これがきっかけになり、04年にホワイト国になった韓国を除外した。一定の手続きをすればフッ化水素などを容易に輸入できるにもかかわらず、韓国で大騒ぎとなり、多くの国民はなぜ韓国があれほど騒ぐのかに驚いたのだらう。

しかし、モノづくりに携わる筆者には、韓国のショックを十分に理解できるのだ。韓国はほかに半導体のウエハーなどの材料や製

り、小惑星に探査機を着陸させ石を持ち帰った技術、30回連続衛星の打ち上げに成功しているH-IIAロケット技術、簡単に兵器に転用できる固体ロケット技術は世界のトップレベル、特殊材料のライオンアップも断トツで世界一だ。

世界で宇宙興産と日本カーボンしか生産できない超高温に耐える材料が開発されたことで、低燃費のジェットエンジン生産で世界のシェアを握る日も遠くない。金型技術は言うに及ばず、日本にしかない超精密工作機も少なくない。毎年、広い分野のノーベル賞受賞ではアジアの国々だけではなく、中国人にさえ「アジアの誇りだ」と言わせている。

筆者は若いころ、外交官になりたかったが、親の後継ぎ希望に加え、学力、語学力の不足で志望しな理由で、長期にわたり日本の外交を興味深く注視してきた。

日本の外務省は世界一お人好しに見えるし、独特の紳士的な対応が国家に損害を与えているのではないか。国家間に難題があつた場

作用の工作機や試験機などを、ほぼ日本に頼っている。日本が韓国から輸入に頼らねばならない製品はほとんどないが、韓国は1000点以上の工業製品の一部でも日本から輸入不可となれば製造業は成り立たない。

このように日韓間には比較にならない技術差があるのに、日本製品の不買運動をすることが、韓国の国益に反することすら理解できないのだらうか。

過去には中国がレアメタルの出荷を止めるとの発表に、日本企業が大騒ぎをした。レアメタルが日本にないのは事実だが、中国にない特殊材料や精密工作機など少なくとも500種はある。日本がどうしてこれを武器に抵抗しなかったのか不思議だ。

やられたらやり返す行為は品位に欠けると考える日本人は多いだろう。だが、国家間では、やらねばさらに次の嫌がらせが来るのだ。それを止める意味でも反撃することが国際外交の常識である。

日本人が得意とするモノづくりは今後も磨きをかけ、世界のユー

合、話し合いで済ませようとするが、これでは世界を相手に有利な交渉はあり得ない。交渉をしながら同時に腰には刀を隠し持つて進めるのが外交の基本。いわゆる、強い軍事力なくして有利な交渉ができないことは世界の掟なのだ。

仮に日本の軍事力が強力だとしても、それを前面に出せないのがわが国の憲法だ。基軸通貨でも優位に立てない日本が世界に通用する外交のカードは、モノづくり力ではないのだらうか。資源はなく、外交はお人好しで、憲法で制約のある軍事力では強い先進国としてふるまうことは困難なのだ。

筆者が2015年10月に出版した2冊目の著書のタイトルは『ニッポンのすごい親父力経営』だ。21世紀に入り、残念ながら日本若者はモノづくりにあまり興味なくなつたように思える。少子化によりモノづくりの世界に飛び込む優秀な若者が減りつつある。そのような理由で、日本が並の製造国に落ちれば従来のような先進国型の国家力は維持できないことなどを警鐘した。

ザイが飛びつく工業製品を作り続けることが日本の生きる道だ。そして、国家間の争いが発生するとすれば、日本にとって「モノづくり力」が外交の最強のカードになることを認識していただきたい。

いとう・すみお

1965年立命館大学経営学部を卒業後、伊藤製作所に入社。1986年同社代表取締役就任、現在に至る。順送り金型メーカーの老舗企業であり、国際競争力のある金型製造技術の確立に努め、無人化、高速化、精密化を追求したプレス加工で卓越した技術力を誇る。

(社)日本金型工業会・副会長、国際委員長を歴任。中京大学大学院ビジネスイノベーション研究科客員教授、国立ソウル科学技術大学校金型設計科名誉教授、神戸大学非常勤講師などを務めて後進の育成に寄与。2018年2月は中京大学初の称号、特別栄誉客員教授を授与される。著書に『モノづくりこそニッポンの岩』『ニッポンのすごい親父力経営』がある。

